

# 生徒指導科目における進路指導・キャリア教育の学び

－初等教育での「進路指導・キャリア教育」を学生はどう理解したか－

中山留美子

(奈良教育大学 学校教育講座 (発達心理学))

How students learn about career education in elementary school through lessons about “guidance & counseling”?

Rumiko NAKAYAMA

(Department of School Education, Nara University of Education)

**要旨:** 「進路指導・キャリア教育」と「生徒指導」は、その目的や指導の考え方において重なりのある教育活動である。本稿では、両概念について整理したうえで、両概念をともに扱う授業において、学生がどのような学びを経験するのかを検討した。生徒指導についての学びを踏まえて進路指導・キャリア教育についての学びを展開する実践について、学生の分析内容や感想を分類した。その結果、学生たちは学びを通して、生徒指導において見落とされがちな「問題のない子」にも発達支援的な関わりをもつことや、段階的・継続的な支援を行うことの重要性に気がつくことが示唆された。

**キーワード:** 進路指導・キャリア教育 career education  
生徒指導 guidance & counseling  
初等教育 elementary education

## 1. 問題と目的

平成 11 (1999) 年 12 月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の中で用語が用いられて以降、「キャリア教育」は就学前教育から高等教育、さらに生涯にわたる教育と発達を見通して行われる取り組みとして理解されるようになった。文部科学省 (2011a, p.17) によると、「キャリア」とは、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」のことである。キャリア教育は生涯にわたるこのようなキャリアの発達過程 (キャリア発達) を支援していこうとする活動であり、職業観・勤労観育成やキャリア発達促進の基盤となる諸能力や態度、自己形成を行うことが求められている (国立教育政策研究所, 2002)。

しかし、中学校において行われるキャリア教育が職業体験や進学相談等、自己の具体的な進路に直結するもの (進路指導) であることに対して、小学校におけるキャリア教育は、係や当番などの役割を担う体験から (進路を選択する主体である) 自分自身を知ることや、周囲の働く人々に関心をもつことなど、職業や進学を考える上での前提となる経験や情報を得ることを目的としており、進路との関連を直接意識させる内容は目指されていない (国立教育政策研究所, 2002)。また、児童期は物事を俯瞰的・統合的に思考する力の形成途上であり、経験を自ら内省し、複数の

情報の共通性 (例えば、様々な役割活動の背後にある仕事の分担という考え方) を理解したり、情報間の関連 (例えば、見聞きした職業の特徴と自分自身の性格との関連) について考えたりするということが自然には生じにくい。そのため、児童が体験を自己のキャリア発達と関連するものとして考えられるようにするためには、教師が児童の発達状況に応じたキャリア教育について、深く理解しておくことが必要となる。

そのような背景をふまえ、本稿では、進路指導・キャリア教育についての教員養成教育における扱いについて検討する。特に、生徒指導科目において進路指導・キャリア教育を扱う妥当性と意義について議論し、その扱いによる学びの具体的な内容について、昨年度の授業実践における学生の学びと感想をもとに検討する。

### 1. 1. 進路指導・キャリア教育と生徒指導

これまでに示された文部科学省の定義や説明からは、進路指導とキャリア教育はほぼ同義の概念であり、生徒指導との間にも到達目標や理念において、多くの重なりをもっていることが読み取れる。

まず、進路指導とキャリア教育の関係について、「中学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011b) では、教育活動全体を通じ、計画的、組織的に行われるという点、その定義・概念や狙いにおいて、中学校における進路指導とキャリア教育は「ほぼ同じと言ってよいだろう」とされている (p.37)。

キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤と能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義される(文部科学省, 2011a, p.17)。また、進路指導は「生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験および相談を通して、生徒みずから、将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するように、教師が組織的、継続的に援助する過程である。」と定義され、「さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長する」とは「将来の生活における職業的自己実現に必要な能力や態度を育成する」ことであると解説されている(文部科学省, 2011b, p.34)。

ほぼ同じ定義づけをされつつも両概念がともに用いられる背景には、キャリア教育が就学前段階から体系的に取り組んでいくべきものであるのに対して、進路指導は学習指導要領上、中学校・高等学校に限定された教育活動であり、中学校や高等学校の教員にとっては正規の活動の名称として一般的に用いられているという事情がある(文部科学省, 2011b)。つまり、同様の目的をもつ教育活動について、中学校・高等学校の教員は「進路指導」、それ以外の教員は、「キャリア教育」という名称を充てながら取り組んでいる。このような事情から、両概念はキャリア教育の一定期間を進路指導活動の時期として位置付けるという、包含関係によって理解されている(図1)。

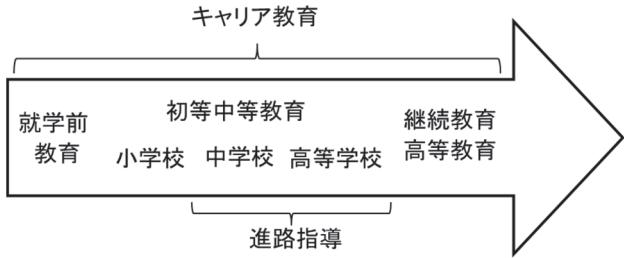


図1 キャリア教育と進路指導の関係  
(文部科学省,2011 p.38 を元に作成)

一方、生徒指導は、平成24年に発行された「生徒指導提要」(文部科学省, 2011c, p.1)によれば、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」と定義され、その目的についてはさらに、「すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指して」行われるものという説明が加えられている。また、生徒指導には「教育課程の外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」という積極的な意義があるとして、「自己実現」を目指す活動であることが説明されている。

これらの定義や説明からは、生徒指導には子どもが現在

の学校生活を有意義なものにするための活動という側面とともに、将来の自己実現に向けて健全に成長していくための活動という側面があることが読み取れる。このうち後者の側面(自己実現に向けた成長)には、将来自分自身で進路を選択し、職業を選択していくということも含まれると考えられ、この側面において、生徒指導と進路指導・キャリア教育は重なるものと捉えられる。進学先や職業に関する情報提供等の独特な部分もあるものの、進路指導・キャリア教育は、児童生徒の社会的資質や行動力、自己指導能力を高めるという生徒指導の一環として捉えることが可能だろう(図2)注1)。



図2 生徒指導と進路指導・キャリア教育の関係

進路指導・キャリア教育と生徒指導は、指導計画立案の考え方においても一致している。「小学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011d)では、キャリア発達を理解したうえでキャリア教育を行うことの重要性が指摘されており、具体的に理解すべき小学校段階でのキャリア発達の特徴が具体的に示されている(p.77)ものの、どの時期に何を扱うのかという具体的な指導計画は、各学校の現状に合わせて策定されることが奨められている。生徒指導についても、児童の発達の特徴を理解した上で行っていく必要とともに、指導効果の高まりが最も期待できる状況や学校行事の計画などを考慮しながら計画を立案する必要があることが指摘されている(文部科学省, 2011c)。

いずれにおいても求められるのは、児童の発達の状況と課題を的確に評価するとともに、次の発達段階を見据えた計画を立案・共有化し、計画の改善を行いながら指導を行っていくことである。また、進路指導・キャリア教育と生徒指導は、何をすれば生徒指導になり、何をすればキャリア教育になるというような、活動内容に規定される指導ではなく、ある活動を通して何を考えさせるか、何を意図して働きかけを行うかという、「視点」としての役割を持つと考えられる。教師の働きかけや子どもの思考活動の展開によって、生徒指導を意図して実施している活動がキャリア教育としての機能をあわせもつことや、逆に、キャリア教育を意図して計画した活動が生徒指導の機能をあわせもつということも考えられる。

1. 2. 生徒指導科目において進路指導・キャリア教育を扱うことの妥当性と意義

進路指導・キャリア教育を生徒指導の一環として捉える立場からも、進路指導・キャリア教育と生徒指導を児童理解や子どもへの関わりの視点として捉える立場からも、進路指導・キャリア教育に関する内容は、生徒指導に関する内容とともに学ばれることが妥当と考えられる。

また、生徒指導科目において進路指導・キャリア教育を扱う意義として、以下の3点が挙げられる。1点目は、進路指導・キャリア教育と生徒指導の概念をともに学ぶことによって、両概念の共通する部分と異なる部分について、比較しながら学ぶことができるという点である。生徒指導が生徒の現在の学校生活への適応と将来の社会生活における自己実現の両方を目指しているのに対し、進路指導・教育相談は基本的に将来を見据えて行う活動である。このような対比について、両概念を同時に学ぶからこそ得られる理解があるものと思われる。

2点目は、進路指導・キャリア教育と生徒指導は、指導計画の策定や指導方法に関して類似しているという点である。生徒指導・キャリア教育も生徒指導も、学校の全教育活動を通して行われ、各学校段階や各学年段階における取組が、計画的、組織的かつ系統的に推進されることが求められている。そのため進路指導・キャリア教育や生徒指導の計画は、部分的に重なり合う形で策定されていくことになる。同時に学ぶことによって、より現実場面に即して進路指導・キャリア教育と生徒指導について考えられるようになるだろう。

3点目は、進路指導・キャリア教育について学ぶことにより、生徒指導活動に関する理解をより妥当なものにすることができるという点である。生徒指導には、概念的には、将来に向けた自己形成という側面が含まれている。しかし、生徒指導は一般的に、現在起こっている（あるいはごく近い将来に起こりうる）問題についてどのように予防的・問題解決的に対応していくかというイメージで捉えられやすい。一方で、目の前にいる子どもが、少し先または遠い将来にどのような力を身につけている必要があるかを考え、見通し、その獲得に向けて取り組んでいくという開発的な指導は発想されにくい。進路指導・キャリア教育の考え方を学ぶことは、児童生徒の自己形成についてより長期的な視野をもって考えられるようになることに繋がるだろう。

2. 方法

2. 1. 授業の全体計画と「キャリア教育」を扱う授業の位置づけ

これまでに述べた考え方にに基づき、生徒指導（および教育相談）についての概念的理解と実践的知識を獲得した後、キャリア教育の概念を導入するという15回の授業計画を作成した（表1）。授業計画は予防的／問題解決的／開

発的な生徒指導という介入の時期に関する枠組みに応じた実践的知識を学ぶという流れとなっており、キャリア教育の概念は開発的な生徒指導の意味をより広い視野で理解する視点として導入した。

表1 授業計画

授業回	テーマ
1.	オリエンテーション
2.	学びの集団づくり
3.	「生徒指導・教育相談」とは
4.	生徒指導における予防的視点 ①事例との出会い
5.	生徒指導における予防的視点 ②視点の獲得と事例の理解
6.	児童生徒の心理と生徒指導 ①事例との出会い
7.	児童生徒の心理と生徒指導 ②視点の獲得と事例の理解
8.	学級集団に対する生徒指導
9.	生徒指導における開発的視点 ①事例との出会い
10.	生徒指導における開発的視点 ②視点の獲得と事例の理解
11.	問題行動に対する生徒指導 ①事例との出会い
12.	問題行動に対する生徒指導 ②視点の獲得と事例の理解
13.	生徒指導における協働と連携
14.	個々を育む生徒指導（全体の振り返り）
15.	試験（新規の事例分析等）
16.	試験の振り返り（分析、指導計画の共有）

2. 2. キャリア教育を扱う授業実践の内容と展開

授業はどの回も、個人での学習または思考の後、グループで理解の共有や議論を行う形式で展開した。キャリア教育を扱う授業実践は、第9回と第10回の授業回において、図3の事例を用いて実施された。事例は、「将来を考えた指導」の重要性について実感しやすくするため、小学校では行動上の問題のなかった子どもが、高校生になってから問題を抱えるという内容とした。学生たちは、第9回の授業では、それまでの授業で獲得した生徒指導に関する知識や素朴な見方を用いて事例を分析し、第10回の授業では、「小学校キャリア教育の手引き」（文部科学省、2011d）の指定箇所（第1章1節）と教員による講義から獲得したキャリア教育とキャリア発達に関する知識を踏まえて再度事例の分析を行った。また、分析結果に基づき、小学校段階で可能であったらう支援について考えた。教員による講義では、「キャリア発達の特徴（p.77）」や「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」（国立教育政策研究所、2002; pp.48-49）の理解を深める視点として、児童期から青年期にかけての自己認識の能力と内容の発達（Harter, 1999）に関する理論の説明を行った。

### 2. 3. 実践の対象者

本実践の主な対象者は主免許として小学校教員の免許状の取得を目指す教員養成課程2回生(92名)であり、副免許としての取得を目指す3・4回生や現職院生も履修生の1割程度(9名)含まれていた。2回生は教育実習を経験しておらず、3回生以上は教育実習経験者であった。学習グループは専修、性別、学年を可能な限りランダムにした4人ないし5人によって構成した。

**事例**

A児は、運動能力こそ平均的であったが、授業に真剣に取り組み、どの教科においても満点をとる子どもだった。安定した友人関係を持ち、クラス活動での役割も十分に果たしていた。手がかからず、授業進行の役にも立ってくれるので、担任にとって「いてくれてありがたい子」であった。Aはそのまま校区の中学に進学し、中学でも優秀な生徒であったため、担任は卒業後は県でトップの公立高校を薦め、無事合格した。

Aは高校でも成績トップの集団に居続けた。しかし、進路選択の時期が迫った高校3年の夏、Aは問題に直面した。自分の進むべき進路がわからないという。高校の担任は、難関大学を薦め、例えば医師になるのはどうかと言ったが、医師という職業に自分が合うのかどうか、よくわからなかった。Aは、大学と職業に関する情報を集め始めたが、焦りと不安で体調を壊し、冬には心理的にも不安定な状態に陥った。

図3 キャリア教育を扱う授業実践で用いた事例

### 3. 結果

#### 3. 1. 授業中の学生の様子に関する授業者の印象

他に扱った事例が全て小学校のみを舞台とした事例であったこともあり、本実践で扱った事例に対する学生の動機づけは当初低かった。個人での思考時間には、それまでに学んだ内容をどのように適用して問題の分析をすればよいか悩んでいる(ワークシートへの記述が進まない)様子も多く見られた。また、グループでの議論の際には、複数のグループから(小学校ではなく)高校での対応を考えるのか、という質問が投げかけられた。

#### 3. 2. キャリア教育学習前後での学生の分析の変化

キャリア教育についての学習を行った前後での学生の分析内容について、それぞれ分類とカテゴリ化を行い、カテゴリに関連する記述の出現数をカウントした(表2)。それまで6回にわたり生徒指導の概念と具体的視点についての学びを蓄積してきたことから、学習前の段階においても、学生は事例に関して豊かな分析を展開していた。

しかし、学習前後の結果を比較すると、一方でしか出現しないカテゴリが複数みられた。すなわち、学習前には、図3の事例について、高校生の問題であり、高校教師が対応すべきという記述(カテゴリ1、2)がみられたが、学習後には、そのような記述はみられなかった。一方、学習後には、発達段階に応じて指導が必要であり、小学校段階ですべきことがあるという記述(カテゴリ15)や、目標設定から省察までの一連の課題探求プロセスを経験する

必要があるという記述(カテゴリ16)等が出現していた。全体の傾向としては、学習前には教師による理解や挫折や失敗を含めた経験の重要性を指摘する意見が目立ったのに対して、学習後には、経験を自己理解としていくための支援や省察の機会が重要であるという意見が多くなっていることが読み取れた。

表2 キャリア教育学習前後(第9回、第10回)における分析の内容

カテゴリ名	カテゴリの主旨	第9回	第10回
1. 一般的課題	高校生には一般的な課題である／自分自身にも同様の経験がある	12	0
2. 高校での指導対象	高校で指導すべき内容である(小学校教育の対象外)	7	0
3. 適切な自己肯定感形成	過去に自己肯定感が高すぎたり、自己肯定感が形成できなかったことが今回の問題を生じさせた	6	0
4. 失敗や挫折等を乗り越える経験の重要性	失敗や挫折を乗り越える経験によって問題解決力を高めることが必要であった	16	1
5. 自己決定・自己選択の機会の提供と能力育成	小学校時点から、自己決定・自己選択の機会を与え、その力を高めておくべきであった	32	10
6. 深い理解に基づく指導	教師が児童の学習面以外の能力や性格的特徴を捉えて指導にあたるべきであった／教師が決めたことによる生徒指導を行うべきではなかった	29	19
7. 全員への生徒指導の必要性	問題のある生徒だけでなく、優秀な生徒を含む全ての児童に生徒指導を行うべきであった	19	7
8. 自己理解の支援の不足	子どもが自己理解を深める機会を与え、支援するべきであった	18	34
9. 将来を考える機会	将来を考える機会を与えるべきであった	13	7
10. 将来を見据えた指導	将来を見据えた指導を行うべきであった	8	13
11. 自分で考え表現する経験	自分で意見を考え表現する経験をもつべきであった	11	3
12. 勉強以外の(勉強の)目的を持つことの重要性	勉強すること自体を目的にさせたまわぬよう、勉強以外の学びの目的をもたせる指導を行うべきであった	8	3
13. 様々な経験	社会を知るための様々な経験を積んでおくべきであった	4	3
14. 選択肢を知ることの重要性	将来の選択肢にどのようなものがあるのか、豊かな知識を得ておくことが必要であった	3	5
15. 発達段階に応じた指導の蓄積	発達段階ごとに課題があり、それを乗り越えるための指導を各発達段階の教師が行っておくべきであった	0	13
16. 目標設定-省察のプロセス重要性	目標をもって行動だけでなく、その目標に対する結果を自ら省みるという経験を重ねておくべきであった	0	13
17. 見通しを持つ力の育成	何事にも見通しをもって行動する力を育成しておくべきであった	0	4
18. 体験的学びの重要性	座学ではない学びの形式(ロールプレイング、アクティブラーニング)によって、職業や進路について体験的に学ぶ経験をしておくべきであった	0	4

注: 数値は記述の数、下線は一方にしか記述が出現しなかったカテゴリ、太字は20以上の記述があったカテゴリを示す。

#### 3. 3. 実践に対する学生の感想

学習後に学生が提出した学びの感想を分類・整理し表3に示した。最も多かったのは、「問題のない」子にも支援すべき発達課題があるという内容の記述であり、支援の蓄積の重要性に気づいたという記述も多かった。

表3 キャリア教育学習後の学びの感想

カテゴリ名	カテゴリの主旨	記述数
1. 「問題のない子」の発達課題	学級運営、学習指導上「問題のない子」にも個々の課題がある	19
2. 経験の場の重要性	経験の場を設けることが重要である	18
3. 将来を見据えた教育・支援の蓄積の重要性	将来を見据えた教育・支援を小学校段階から継続・蓄積していく必要がある	18
4. 自己理解の重要性	自己理解を深めることが重要である	15
5. 自己選択の重要性	自己選択の機会が重要である	13
6. 適切な理解に基づく指導	教師が思い込み・決めつけによらず、適切に子ども理解をした上で指導を行う必要がある	12
7. 他者評価の重要性	他者評価に触れる機会がキャリア発達において重要である	9
8. 全児童に対する生徒指導と進路指導	すべての児童に対して生徒指導と進路指導を行う必要がある	7
9. 計画的支援と連携	計画的に学年間・学校間の連携をしながら教育的・発達の支援を行うことが重要である	9
10. 社会性育成にかかわる初等教育の役割	初等教育において社会性の育成を行なっていくことが必要である	6
11. 児童に時間的展望を教える	児童に時間的展望を持たせる教育を行う必要がある	5

#### 4. 考察： 生徒指導科目において進路指導・キャリア教育を扱う意義

キャリア教育は小学校段階から丁寧に行っていく必要があるが、小学校教員にとってはその目的が見えにくく、単に活動を行うのみでは形骸化してしまう危険がある。本実践の対象となった学生たちにも、キャリア教育に関する学習の前には、小学校時点で可能であった支援について考えさせているにもかかわらず、のちの進路の問題について、小学校教員には無関係のこととして捉えている者がいた。

また、学びの後の感想では、「問題」を前提としない発達支援的な関わりを積み重ねることの重要性に言及した学生が多かった。学生たちは進路指導・キャリア教育に関する学びを通して、それまでに学習した生徒指導の理解の範囲を、「問題を前提とした予防的・問題解決的な指導」から、「子どもの段階的な発達を支えるという意味での開発的な指導」へと拡大したと考えられる。

進路指導・キャリア教育における経験や情報収集の重要性はいうまでもない。しかし小学校段階で求められる経験は、職業体験のような進路に密接した体験活動というより、日々の生活の中で多様な役割を果たすという意味合いが強いものと捉えられる。高学年になると、具体的な職業等の進路に関する情報に触れたり、自ら情報を集めて共有するということが重要になってくるが、この目的も、自らの適性に応じた職業等の進路を見つけるというよりは、社会に多様な役割があり、自分自身もいつかはその役割を担っていくという見通しをもつというものであろう。

生徒指導では、子どもが学校生活への適応を果たし、学級での日々の活動の中で役割を担い、適切な行動をとって

いく（自己指導能力を高める）ことの支援に重点が置かれる。教師にとって、子どもの未来もちろん重要であるものの、児童への指導支援の基本的目標は、やはり日々の学校生活を支えることであろう。しかし、キャリア教育の視点を理解することで、教師は日常の中でも児童たち自身に目標や見通し、自己評価の視点をもたせ、自覚的な自己形成を促すことを意識しながら日々の学校生活に関する指導支援を行うことができるようになる。このような学びが、生徒指導科目において進路指導・キャリア教育を扱うことによって得られるものであると考えられる。

今後、生徒指導における予防／問題解決／開発の枠組みとキャリア教育の連続性をより理解しやすい事例や分析の視点について検討するとともに、これらの考え方を適切に理解し豊かに実践を計画できるような授業の全体計画について、検討を重ねていくことが必要であろう。

#### 注

- 1) 生徒指導と進路指導・キャリア教育の関連は、ほかにも様々に捉えられる。たとえば進路指導・キャリア教育は広義に「よりよく生きること」や「生き方」に関する教育と考えられ、この考え方からは、生徒指導と概念的に重なると捉えることも可能であるし、両者が分掌として分けられていることから、重なりが無いものとしても捉えられる。本論では、生徒指導を主に学ぶ科目の中で進路指導・キャリア教育を扱う意義を考えるという論の目的から、「生徒指導」の定義上明示的に扱われておらず、一方で「進路指導・キャリア教育」においては主たる内容と位置づけられる、進学や就職に関わる部分を狭義の進路指導・キャリア教育と考える立場をとった。

#### 参考文献

- Harter, S. (1999). The construction of the self: A developmental perspective. Guilford Press.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書) <http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>, 2017.11.3 閲覧
- 文部科学省. (2011a). 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 中央教育審議会答申」. 文部科学時報, (1623), 1-292.
- 文部科学省 (2011b) 生徒指導提要 教育図書
- 文部科学省 (2011c) 中学校キャリア教育の手引き [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/1306815.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1306815.htm) 2017.11.3 閲覧
- 文部科学省 (2011d) 小学校キャリア教育の手引き(改訂版) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/1293933.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1293933.htm) 2017.11.3 閲覧